



ニッポン ドクター和の 臨終凶巻

長尾和宏 (ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終凶巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

私が原作と医療監修を手掛けた劇映画『痛くない死に方』及び、関連作品のドキュメンタリー映画『けつたいな町医者』が全国にて公開中。本業に差し支えない範囲で舞台挨拶にお邪魔しています。そこで医療従事者の方々から声をかけられるのがうれしいです。

先日名古屋の舞台挨拶の後、ALS患者さんの在宅療養支援に日々頑張っておられる看護師さん方とお話をする機会があり、大変心強く思いました。その数日後、この俳優さんの訃報を知りました。

数々のドラマや映画、舞台上で活躍、さらにシヨン・コネリーやクリント・イーストウッドの吹替え声優などでも知られた瑛川哲朗さんが、2月17日に都内の高齢者施設で死去されました。享年84。死因は、ALSとの発表です。

俳優 瑛川哲朗

195



ALS(筋萎縮性側索硬化症)は、筋肉に指令を出す運動神経細胞が何らかの理由によりダメージを受け、筋力が低下し身体が動かせなくなっていく難病です。我が国における患者数は約1万人で、年間1000、2000人が新たに診断されています。

この連載でも過去に書かせていただきましたが、フランス文学者の篠沢秀夫さん(2017年没、享年84)や、佐伯チズさん(2020年没、享年76)も同じ病気でした。

昨夏に起きた「京都ALS囁託殺人事件」の影響で、この疾患に悲観的なイメージを持った人もいるかもしれませんが、一面的に捉えないでほしいと思います。

私の患者さんにも、同じ病の人が数人おられます。なかには呼吸器を付けて充実した日々を送られている人も。20、30年前までは、ALSの人は発症から3、5年で亡くなるとされてきました。進行具合は人それぞれであり、医療の発達により、平均寿命を超え天寿を全うでき

る人も出てきています。進行とともに発声や手の動きが困難になって、コミュニケーションが取れなくなるのが、この病気の辛いところです。精神的ショックを受けて、うつ状態になってしまう人もおられます。しかしここ10年あまりで、画期的な意思伝達装置が次々と生まれています。まばたきや頭の傾け方などの小さな動きをセンサーが拾って、言語化する装置や、脳の血流や皮膚の表面の電位を計測して意思を伝える機械が登場し活躍しています。

いつでも美声思い出せる

瑛川さんが、いつからALSを発病されていたのかは明らかにされていませんが、男性の平均寿命(81歳)を超えて生きられたことは、素晴らしいことです。最後は声が出なかつたかもしれない。でも、彼の素晴らしい美声は、過去の幾多の出演作を見ることがいつでも思い出すことができるのです。

ALS発病も平均寿命を超えて